

森鷗外全集

3



筑摩書房

森鷗外全集

3

筑摩書房

森鷗外全集第三卷



昭和四十年六月二十五日 初版發行

著者 森 鷗 外

發行者 古 田 晁
東京都千代田區神田小川町二ノ八

發行所 筑 摩 書 房
東京都千代田區神田小川町二ノ八

電話東京四七六五一（代表）
振替東京四一 二二三

印刷 三晃印刷株式會社
製本 美行製本有限會社

森鷗外全集

第三卷

日本人としての魂のきしみ

大原 富枝

鷗外の作品にはじめて接したのは女学校の教科書であり、「高瀬舟」であった。この作品についてはいつか長女の茉莉さんが書いている小文を読んだことがある。茉莉さんが幼いとき百日ぎにかかってとても重かったとき医者が安楽死をすすめたことがあり（それが鷗外の母の提案であった）鷗外もそれを承知したが、夫人の父が止めた。お蔭で茉莉さんは生命をとり止めた。その事があってから鷗外は老母と自分たち夫婦親子の生活にはつきり一線を画したということが書かれてあって、そのときの心の痛みと怒りとが「高瀬舟」を書かせたものだ、という小文である。遺族の言はそのままに信じてしまつては危険な要素を多分に持つてはゐる。しかしこの小文は私には面白かつた。

鷗外はそのあとこの話は「翁草」にでていゝるもので見て興味を持って書くことになつたと書いている。しかしこれを書くこと

3 月 報
昭和40年6月

目次

日本人としての魂のきしみ……大原富枝
鷗外と漱石の文章……杉森久英

東京都千代田区
神田小川町2の8

房書摩筑

き茉莉さんのいう話も念頭にあったらどう思う。「高瀬舟」は年譜を見ると大正五年一月、五十五歳の時の発表である。鷗外は大正元年九月十三日、乃木大将夫妻の自刃の日、初の歴史小説「興津弥五右衛門の遺書」を書いている。歴史小説は鷗外という大山脈の一支脈ではあるけれども、見方によっては主山脈をなすものともいえる。鷗外という存在のために、日本の後世の作家は古い時代のもを書くとき必ず自分の上に鬱蒼と生い茂るものの影を感じないわけにはゆかなくなる。自分では鷗外を全く意識しないで書いても、書いたものを批評されるときは必ず鷗外が一種のものさしとして引き出されてくるのになうんざりしてしまう。

確かに鷗外の偉大さは彼よりあとに生まれてくる作品の上に、鬱蒼と覆いかかる力をもっている。例えば鷗外全集のどこを開いても、忽ちそこから一つの強い力が働きかけてくる。初期のあの美しい翻訳「即興詩人」から後期の歴史小説のわずかず、そして晩年の「瀧江抽斎」など一連の史伝までを眺めわたすと、典型としての一人の明治人を感じる。私たちにとても鷗外はすでに古典に属しつつある。しかも私たちが当然受けつがなければならぬものを、殆ど正しい、或はこれだけはどうし

ても伝えなければならぬもの、といった形で伝えている。

私は鷗外の歴史物を讀むたび、「日本人の悲しみ」といったものを受ける。世界の歴史にも珍らしい三百年間のじつに巧妙な庄政の中で、出来上った約束の世界で一人一人の運命を生きた人間たちの魂のうめきが湧きでてるように思う。作品の主人公たち、ここに現われる日本人たちは、皆それぞれこういてゐるように見えるのだ。「自分にはもつと別の生き方だつてできたのだ。しかしこういう生き方しか許されないのだ。それなら、深くここに生きよう。自分なりの生き方でこのなかで生きて見せよう——」

そしてこの主人公たちが私たちの心をうつのは、彼等のあたえられた運命のわくが、非常に特殊に見えながら、しかし普遍性をもっているところにあるのだ、と思う。彼等は徳川時代に生きていて、あの重苦しい政治的条件の中にいた。魂のきしむような死を死んでいった。

しかし現代に生きてゐる私たちが果して彼等とどれだけちがつてゐるだろう、と私は考えてみるのである。コンゴの前首相ルムンバの「息子よ、明日は明るい」という遺書を見れば、私たちは魂をしめつけられるうめきを洩らさずにはいられない。

バステルナークの生前から長い間彼の秘書として彼を愛してきた女性が、ささやかな罪状によつて八年間の投獄に処せられたという記事を見たのもつい最近である。

人間の生きる限り、どこかに起つてゐるこういう魂のきしむような悲しみは、絶える日がいつかあるだろうか——
もしもそういう日がきたとしたら、鷗外の歴史ものの魂のう

めきは、読者にとつて理解しがたいものになるだろう。しかしそういう日はあり得るとは私にはとても思えないのである。

鷗外の全作品を眺め渡してみると、人間が年齢によつて考えることの変つてゆく姿を、(思想というよりもその色合いの変化を)典型的に見せてゐる。いかにも一人の人間が十分に考え、十分に書いた、ということを感じる。しかもなお否みがたく、「十分には生きられなかつた」という、明治の一人の知識人のうめきをそこに微かならず聴きとらざるを得ないということなのである。

島崎藤村などにも日本人の悲しみということを想わされるが、それはずっと小さく、部分的であるように私は思う。鷗外が日本人の中に生き残つてゆくのは、この大いなる「日本人としての悲しみ」を懸^{うか}える魂のきしみにあると思つてゐる。

鷗外と漱石の文章

杉森久英

一

私はこの間、ある所で「文章の味わい方」という題で講話をすることを求められた。大体私は、文章には味わい方なんてものではないというのが持論で、したがつて私のその日の論旨は、自分の掲げた演題そのものを否定することに終始するという奇現象を呈した。

なぜ文章に味わい方がないかといえば、たとえば、お菓子の味わい方というものがあるかどうか、考えてみれば、わかるだろう。お菓子を味わうという行為は（これを行為と呼べるかどうか問題だが）お菓子をたべるという行為の中にくまれてしまっている。文章を味わうという「行為」も文章を読むという行為と共にあるので、読むときはすでに味わってしまったのであるのだ。どうして味わうという行為だけ、読むことから抽出することができようか。大体において「味わい方」などという考えが頭にうかんだりするのは、すでに味わっていない証拠なのである。つまり、感受性がぶくくて、自分で味わっていないから、不安をおぼえて「味わい方」のことなんか考えたりするものである。ちょうど、人生の幸福について、一生懸命思索にふける人は、もともと不幸な人で、ほんとに幸福な人は、幸福とは何かなんて、考えもしないように。

そんなことをいろいろしゃべっているうちに、私はいくつか鵜外の文を例にあげて、これこそ当代散文の極致だという意味のことを言った。会が終ってから、聴衆の一人が質問して曰く、あなたは鵜外を絶讃されたが、漱石については一言も触れられなかった。漱石の文章はよくないのかと。私は言下に、漱石の文章は鵜外ほどよくないですと言った。彼は不満そうだった。

そこで私は付け加えた。文章そのものでは私は鵜外を漱石より高く買いたい、文学者としては、私は漱石の方に親しみをおぼえる。漱石の文章は、鵜外にくらべて、きちんとしていないくて、誇張が多すぎたり、饒舌すぎたり、悪趣味だったり、言

い過ぎたり、言い足りなかったり——要するに雑然としていて、しかし、ふしぎに、底の方に人間的な温かさをたたえていて、人を惹きつける力を持っている。鵜外の文は一分のすきもなく整っているけれど、肌触りはつめたく、ひえびえしている。もっともその冷たさは、切れ味のいい刃物を頬に当てたときのように、ひんやりして快いのだが……

その人は大体納得してくれたようにみえた。

二

鵜外と漱石の少年時代に、それぞれ似たような挿話がある。

鵜外は十四五歳のころ、神田小川町の西周邸に寄寓して、本郷荻坂の進文学舎へかよっていた。土曜日ごとに、向島須崎村の父の家へ帰るのだが、途中、吾妻橋の下の渡し場を渡らねばならない。父から一週間の小遣に一朱貰うのが例になっていた。一朱は六錢二厘五毛である。しかし土曜に渡しに乗るため、文久一つ、つまり一厘五毛を残しておかねばならない。ところが、ある日曜日の朝、向島へゆくのに、その文久がなかった。大いに困ったが、渡し場のそばに材木問屋があるのを見て、その帳場の爺さんに、文久を一つ、明日まで貸してくれまいかといった。爺さんは、ええ、朝っぱらからいまいましいと言いながら、貸してくれた。彼は言いぐさが癪に障らぬでなかったが、必要に迫られて借りた。翌日それを持って返すと、爺さんはいらないといった。彼は腹が立ったから、文久を爺さんの顔に投げつけて、一生懸命かけて逃げた。これは明治四十二年六月の「少年世界」にのっている。

漱石の話は「硝子戸の中」にある。彼が小学校へ行っているころ、近所に喜いちゃんという友達があった。二人とも漢学が好きで、わかりもしない癖に、よく議論などして面白がっていた。喜いちゃんはあるとき、太田南畝の自筆という写本を見せ、友達が売りたいといっているから買わないかといった。五十銭だということところを、二十五銭に値切って買った。あくる日になると、喜いちゃんがやって来て、あの本を返してくれという。友達の父親が知って、怒っている。何しろ二十五銭では安すぎるというのである。

「此最後の一言で、私は今迄安く買ひ得たといふ満足の裏に、ぼんやり潜んでゐた不快——不善の行為から起る不快——を判然自覚し始めた。さうして一方では狡猾い私を怒ると共に、一方では二十五銭で売つた先方を怒つた。何うして此二つの怒りを同時に和らげたものだらう。私は苦い顔をしてしばらく黙つてゐた」

原文にはこうある。そして彼はいきなり机の上にあつた本を取つて、喜いちゃんにつき出した。喜いちゃんは二十五銭返さうとしたが、彼は

「其金なら取らないよ」

「何故」

「何故でも取らない」

「左右か。然し詰らないぢやないか、たゞ本文返すのは。本を返す位なら二十五銭も取り給ひな」

「本は僕のものだよ。一旦買つた以上は僕のものに極つてゐるぢやないか」

「そりや左右に違ひない。違ひないが向の宅でも困つてゐるんだから」
「だから返すと云つてゐるぢやないか。だけど僕は金を取る訳がないんだ」

こんな問答のあげく、喜いちゃんは本だけ持って帰つた……これが漱石の場合である。

私はいつか、子供のための教訓的な話を求められたとき、この二つの挿話を紹介して、しっかりした人は、子供の時から自分の身の考えをはっきり持っているものだといふ結論めいたものを付け加えておいた。しかし、いま考えると、この挿話は、鷗漱二家の文学のちがいを示していると思われるのだ。五十銭のものを二十五銭で買うという「不善の行為」から起る不快を、はつきり見つけるところに、漱石の文学の根があるように思うのである。

次回配本

七月十八日發行

第四卷 史傳一

栗山大膳 津下四郎左衛門 梶原品 澀江抽
齋 壽阿彌の手紙 都甲太兵衛 鈴木藤吉郎
細木香以 小嶋宝素

第三卷
目次

雁	三
鎚一下	六
天 寵	八
二人の友	五
餘 興	六
興津彌五右衛門の遺書	一〇〇
阿部一族	一一
佐橋甚五郎	一三五
護持院原の敵討	一四一
大鹽平八郎	一六
堺事件	二〇五
安井夫人	三二
山椒大夫	三四

魚玄機

ちいさんばあさん

最後の一句

高瀬舟

寒山拾得

玉篋兩浦嶼

日蓮聖人辻説法

語注
解説

一五

一五

七

八〇

二八九

二九六

三二

尾形 仂 三九

吉田精一 四三

森鷗外全集

第三卷

雁

壹

古い話である。僕は偶然それが明治十三年の出来事だと云ふことを記憶してゐる。どうして年をはつきり覚えてゐるか云ふと、其頃僕は東京大學の鐵門の眞向ひにあつた、上條と云ふ下宿屋に、此話の主人公と壁一つ隔てた隣同士になつて住んでゐたからである。その上條が明治十四年に自火で焼けた時、僕も焼け出された一人であつた。その火事のあつた前年の出来事だと云ふことを、僕は覚えてゐるからである。

上條に下宿してゐるものは大抵醫科大學の學生ばかりで、其外は大學の附屬病院に通ふ患者なんぞであつた。大抵の下宿屋にも特別に幅を利かせてゐる客があるもので、さう云ふ客は第一金廻りが好く、小氣が利いてゐて、お上さんが箱火鉢を控へて据わつてゐる前の廊下を通るときは、きつと聲を掛ける。時々はその箱火鉢の向側にしやがんで、世間話の一つもする。部屋で酒盛をして、わざ／＼肴を拵へさせたり何

かして、お上さんに面倒を見させ、我儘をするやうでゐて、實は帳場に得の附くやうにする。先づぎつとかう云ふ性の男が尊敬を受け、それに乘じて威福を擅にすると云ふのが常である。然るに上條で幅を利かせてゐる、僕の壁隣の男は頗る趣を殊にしてゐた。

此男は岡田と云ふ學生で、僕より一學年若いのだから、兎に角もう卒業に手が届いてゐた。岡田がどんな男だと云ふことを説明するには、その手近な、際立つた性質から語り始めなくてはならない。それは美男だと云ふことである。色の蒼い、ひよろ／＼した美男ではない。血色が好くて、體格ががつしりしてゐた。僕はあんな顔の男を見たことが殆ど無い。強ひて求めれば、大分あの頃から後になつて、僕は青年時代の川上眉山と心安くなつた。あのとう／＼窮境に陥つて悲慘の最期を遂げた文士の川上である。あれの青年時代が一寸岡田に似てゐた。尤も當時競漕の選手になつてゐた岡田は、體格では適かに川上なんぞに優つてゐたのである。

容貌は其持主を何人にも推薦する。併しそればかりでは下宿屋で幅を利かすことは出来ない。そこで性行はどうかと云ふと、僕は當時岡田程均衡を保つた書生生活をしてゐる男は少からうと思つてゐた。學期毎に試験の點數を争つて、特待生を狙ふ勉強家ではない。遣る丈の事をちやんと遣つて、級の中位より下には下らずに進んで來た。遊ぶ時間は極つて遊ぶ。夕食後に必ず散歩に出て、十時前には間違なく歸る。日

曜日には舟を漕ぎに行くか、さうでないときは遠足をする。

競漕前に選手仲間と向島に泊り込んでゐるとか、暑中休暇に故郷に歸るとかの外は、壁隣の部屋に主人のゐる時刻と、留守になつてゐる時刻とが狂はない。誰でも時計を號砲に合せたことを忘れた時には岡田の部屋へ問ひに行く。上條の帳場の時計も折々岡田の懷中時計に據つて匡されるのである。周囲の人の心には、久しく此男の行動を見てゐればゐる程、あれは信賴すべき男だと云ふ感じが強くなる。上條のお上さんがお世辭を言はない、破格な金遣ひをしない岡田を褒め始めたのは、此信賴に本づいてゐる。それには月々の勘定をきちんとすると云ふ事實が與かつて力あるのは、ことわるまでもない。

「岡田さんを御覽なさい」と云ふ詞が、屢々お上さんの口から出る。

「どうせ僕は岡田君のやうなわけには行かないさ」と先を越して云ふ學生がある。此の如くにして岡田はいつとなく上條の標準的下宿人になつたのである。

岡田の日々の散歩は大抵道筋が極まつてゐた。寂しい無縁坂を降りて、藍染川のお齒黒のやうな水の流れ込む不忍の池の北側を廻つて、上野の山をぶらつく。それから松源や雁鍋のある廣小路、狭い賑やかな仲町を通つて、湯島天神の社内に這入つて、陰氣な臭橋寺の角を曲がつて歸る。併し仲町を右へ折れて、無縁坂から歸ることもある。これが一つの道

筋である。或る時は大學の中を抜けて赤門に出る。鐵門は早く鎖されるので、患者の出入する長屋門から這入つて抜けるのである。後に其頃の長屋門が取り拂はれたので、今春木町から衝き當る處にある、あの新しい黒い門が出来たのである。赤門を出てから本郷通りを歩いて、栗餅の曲轡をしてゐる店の前を通つて、神田明神の境内に這入る。そのころまで目新しかつた目金橋へ降りて、柳原の片側町を少し歩く。それからお成道へ戻つて、狭い西側の横町のどれかを穿つて、矢張臭橋寺の前に出る。これが一つの道筋である。これより外の道筋はめつたに歩かない。

此散歩の途中で、岡田が何をするかと云ふと、ちよい／＼古本屋の店を覗いて歩く位のものであつた。上野廣小路と仲町との古本屋は、その頃のが今も二三軒残つてゐる。お成道にも當時その儘の店がある。柳原のは全く廢絶してしまつた。本郷通のは殆ど皆場所も持主も代つてゐる。岡田が赤門から出て右へ曲ることのめつたにないのは、一體森川町は町幅も狭く、窮屈な處であつたからでもあるが、當時古本屋が西側に一軒しかなかつたのも一つの理由であつた。

岡田が古本屋を覗くのは、今の詞で云へば、文學趣味があるからであつた。併しまだ新しい小説や脚本は出てゐぬし、抒情詩では子規の俳句や、鐵幹の歌の生れぬ先であつたから、誰でも唐紙に摺つた花月新誌や白紙に摺つた桂林一枝のやうな雑誌を讀んで、槐南夢香なんぞの香奩體の詩を最も

氣の利いた物だと思ふ位の事であつた。僕も花月新誌の愛讀者であつたから、記憶してゐる。西洋小説の翻譯と云ふものは、あの雑誌が始めて出したのである。なんでも西洋の或る大學の學生が、歸省する途中で殺される話で、それを談話體に譯した人は神田孝平さんであつたと思ふ。それが僕の西洋小説と云ふものを讀んだ始であつたやうだ。さう云ふ時代だから、岡田の文學趣味も漢學者が新しい世間の出來事を詩文に書いたのを、面白がつて讀む位に過ぎなかつたのである。

僕は人附合ひの餘り好くない性であつたから、學校の構内で好く逢ふ人にも、用事がなくては話をしない。同じ下宿屋にゐる學生なんぞには、帽を脱いで禮をするやうなことも少かつた。それが岡田と少し心安くなつたのは、古本屋が嫌をしたのである。僕の散歩に歩く道筋は、岡田のやうに極まつてはゐなかつたが、脚が達者で縦横に本郷から下谷、神田を掛けて歩いて、古本屋があれば足を止めて見る。さう云ふ時に、度々岡田と店先で落ち合ふ。「好く古本屋で出くはすぢやないか」と云ふやうな事を、どつちからか言ひ出したのが、親しげに物を言つた始である。

其頃神田明神前の坂を降りた曲角に、鉤なりに縁臺を出して、古本を曝してゐる店があつた。そこで或る時僕が唐本の金瓶梅を見附けて亭主に値を問ふと、七圓だと云つた。五圓に負けてくれと云ふと、「先刻岡田さんが六圓なら買ふと仰やいましたが、おことわり申したのです」と云ふ。偶然僕は

工面が好かつたので言値で買つた。二三日立つてから、岡田に逢ふと、向うからかう云ひ出した。
「君はひどい人だね。僕が切角見附けて置いた金瓶梅を買つてしまつたぢやないか。」

「さう／＼君が値を附けて折り合はなかつたと、本屋が云つてゐたよ。君欲しいのなら譲つて上げよう。」

「なに。隣だから君の讀んだ跡を貸して貰へば好いさ。」

僕は喜んで承諾した。こんな風で、今迄長い間壁隣に住まひながら、交際せずゐた岡田と僕とは、往つたり來たりするやうになつたのである。

貳

その頃から無縁坂の南側は岩崎の邸であつたが、まだ今のやうな巍々たる土塀で圍つてはなかつた。きたない石垣が築いてあつて、苔蒸した石と石との間から、齒菜や杉菜が覗いてゐた。あの石垣の上あたりは平地だか、それとも小山のやうにでもなつてゐるか、岩崎の邸の中に這入つて見たことのない僕は、今でも知らないが、兎に角當時は石垣の上の所に、雑木が生えたい程生えて、育ちたい程育つてゐるのが、往來から根まで見えてゐて、その根に茂つてゐる草もめつたに苛られることがなかつた。

坂の北側はけちな家が軒を並べてゐて、一番體裁の好いのが、板塀を繞らした、小さいしもた屋、その外は手職をする

男なんぞの住ひであつた。店は荒物屋に烟草屋位しかなかつた。中に往來の人の目に附くのは、裁縫を教へてゐる女の家で、書間は格子窓の内に大勢の娘が集まつて爲事をしてゐた。時候が好くて、窓を明けてゐるときは、我々學生が通ると、いつもべちやくちや盛んにしゃべつてゐる娘共が、皆顔を擧げて往來の方を見る。そして又話をし續けたり、笑つたりする。その隣に一軒格子戸を綺麗に拭き入れて、上がり口の叩きに、御影石を塗り込んだ上へ、折々方に通つて見ると、打水のしてある家があつた。寒い時は障子が締めてある。暑い時は竹簾が卸してある。そして爲立物師の家の賑やかな爲めに、此家はいつも際立つてひっそりしてゐるやうに思はれた。

此話の出來事であつた年の九月頃、岡田は郷里から歸つて間もなく、夕食後に例の散歩に出て、加州の御殿の古い建物に、假に解剖室が置いてあるあたりを過ぎて、ぶら／＼無縁坂を降り掛かると、偶然一人の湯歸りの女が彼爲立物師の隣の、寂しい家に這入るのを見た。もう時候が大ぶ秋らしくなつて、人が涼みにも出ぬ頃なので、一時人通りの絶えた坂道へ岡田が通り掛かると、丁度今例の寂しい家の格子戸の前まで歸つて、戸を明けようとしてゐた女が、岡田の下駄の音を聞いて、ふいと格子に掛けた手を停めて、振り返つて岡田と顔を見合せたのである。

紺縮の單物に、黒襦子と茶献上との腹合せの帯を締め

て、緋左の手に手拭やら石鹼箱やら糠袋やら海綿やらを、細かに編んだ竹の籠に入れたのを解けに持つて、右の手を格子に掛けた儘振り返つた女の姿が、岡田には別に深い印象をも與へなかつた。併し結び立ての銀杏返し、鬢が蟬の羽のやうに薄いのと、鼻の高い、細長い、稍寂しい顔が、どこの加減か額から頬に掛けて少し扁たいやうな感じをさせるのが目に留まつた。岡田は只それ丈の刹那の知覺を閱歷したと云ふに過ぎなかつたので、無縁坂を降りてしまふ頃には、もう女の事は綺麗に忘れてゐた。

併し二日ばかり立つてから、岡田は又無縁坂の方へ向いて出掛けて、例の格子戸の家の附近く來た時、先きの日の湯歸りの女の事が、突然記憶の底から意識の表面に浮き出したので、その家の方を一寸見た。豎に竹を打ち附けて、横に二段ばかり細く削つた木を渡して、それを蔓で巻いた脇掛窓がある。その窓の障子が一尺ばかり明いてゐて、卵の殻を伏せた萬年青の鉢が見えてゐる。こんな事を、幾分かの注意を拂つて見た爲めに、歩調が少し緩くなつて、家の眞前に來掛かるまでに、數秒時間の餘裕を生じた。

そして丁度眞前に來た時に、意外にも萬年青の鉢の上の、今まで風色の間に鎖されてゐた背景から、白い顔が浮き出した。しかもその顔が岡田を見て微笑んでゐるのであつた。

それからは岡田が散歩に出て、此家の前を通る度に、女の

顔を見ぬことは殆ど無い。岡田の空想の領分に折々此女が闖入して来て、次第に我物顔に立ち振舞ふやうになる。女は自分の通るのを待つてゐるのだらうか、それともなんの意味もなく外を見てゐるので、偶然自分と顔を合せることになるのだらうかと云ふ疑問が起る。そこで湯歸りの女を見た日より前に溯つて、あの家の窓から女が顔を出してゐたことがあつたか、どうかと思つて考へて見るが、無縁坂の片側町で一番騒がしい爲立物師の家の隣は、いつも綺麗に掃除のしてある、寂しい家であつたと云ふ記念の外には、何物も無い。どんな人が住んでゐるだらうかと疑つたことは慥かにあるやうだが、それさへなんとも解決が附かなかつた。どうしてもあの窓はいつも障子が締まつてゐたり、簾が降りてゐたりして、その奥はひっそりしてゐたやうである。さうして見ると、あの女は近頃外に氣を附けて、窓を開けて自分の通るのを待つてゐることになつたらしいと、岡田はとう／＼判斷した。

通る度に顔を見合せて、その間々にはこんな事を思つてゐるうちに、岡田は次第に「窓の女」に親しくなつて、二週間も立つた頃であつたか、或る夕方例の窓の前を通る時、無意識に帽を脱いで禮をした。其時微白い女の顔がさつと赤く染まつて、寂しい微笑の顔が華やかな笑顔になつた。それから岡田は極まつて窓の女に禮をして通る。

参

岡田は虞初新誌が好きで、中にも大鐵椎傳は全文を誦誦することが出来る程であつた。それで餘程前から武藝がしたいと云ふ願望を持つてゐたが、つひ機會が無かつたので、何にも手を出さずにゐた。近年競漕をし始めてから、熱心になり、仲間に加はれて選手になる程の進歩をしたのは、岡田の此一面の意志が發展したのであつた。

同じ虞初新誌の中に、今一つ岡田の好きな文章がある。それは小青傳であつた。あの傳に書いてある女、新しい詞で形容すれば、死の天使を闖の外に待たせて置いて、徐かに脂粉の粧を凝すとても云ふやうな、美しさを性命にしてゐるあの女が、どんなにか岡田の同情を動かしたであらう。女と云ふものは岡田のためには、只美しい物、愛すべき物であつて、どんな境遇にも安んじて、その美しさ、愛らしさを護持してゐなくてはならぬやうに感ぜられた。それには平生香奩體の詩を讀んだり、sentimental な、faisitique な明清の所謂才人の文章を讀んだりして、知らず識らずの間にその影響を受けてゐた爲めもあるだらう。

岡田は窓の女に會釋をするやうになつてから餘程久しくなつても、其女の身の上を探つて見ようとしなかつた。無論家の様子や、女の身なりで、圍物だらうとは思はれた。併し別段それを不快にも思はない。名も知らぬが、強ひて知らうと